

## 論文審査の結果の要旨

令和2年 7月 31日

申請者： 秦 松梅

論文題目： 生態学的リテラシーを統合した会話スキルの育成を目指す持続的可能性日本語会話授業の研究 ―中国の大学における日本語専攻学習者の場合―

中国人日本語学習者は、文字媒介の読み書きに比べて話すことに対する苦手意識を持つことが多い。加えて、中国では、近年、日本語専攻卒業者がその専門分野を活かして就業することが困難になってきている。本提出論文は、中国の大学における日本語専攻の会話授業で、持続可能に生きることを展望しながら生きる力、すなわち生態学的リテラシーを統合した会話スキルの育成を目指した持続可能性日本語会話授業のモデルの提案を目的としてなされた実証研究である。

本提出論文は横断研究と縦断研究の両者を含む5つの実証研究で構成されている。その第一の特徴は、学習の当事者である学習者の目線で徹底して進められたことである。まず、現行の会話授業の問題点を、日本語専攻学習者がどのように捉えているかという観点から明らかにした。次に、その問題点を克服するために提案した持続可能性日本語会話授業を、学習活動の分析だけでなく、受講生の受け止めからも検証している。

第二の特徴は、教室内活動のみが焦点化されてきた先行研究に対して、概念化、言語化、発音化という会話過程の特徴(Levelt:1989)に着目し、概念化を事前課題として教室の外に出し、その下に、教室内活動として言語化・音声化を追求する新たな会話授業のモデルを提示したことである。提示されたモデルは5つの実証研究によって得られた知見を統合して構築され、極めて説得性の高いモデルとして評価された。

第三の特徴は、調査が長期にわたって丁寧に行われたことである。新たなモデルによる会話授業の受け止めと効果について、授業直後に加え3年後にも調査を実施し、持続可能性日本語会話授業の有効性を実証した。

本提出論文は5つの実証研究を明快な構成でまとめ上げて独創的な会話授業モデルを提示した研究であり、中国のみならず日本語教育の現場に多くの示唆を与える研究として高く評価された。

口述審査は、令和2年7月27日(月)城西国際大学東金キャンパスからWebexオンラインにて実施された。申請者は、論文の内容をわかりやすくまとめ、図を効果的に使って発表した。その後、審査員からの質疑に対して丁寧に答え、満足すべき応答が得られた。特に、5つの研究相互の関連やそれぞれの研究において使われている研究方法との適合性をめぐる質疑における応答は実には的確であった。また、今後の研究の進展についても明確な課題をもっており、持続可能性日本語教育の実践家・研究者として大いに期待される。

提出論文も口述審査も博士の学位に十分値するものと判断して合格とした。

審査員(主査) 野々口 ちとせ

審査員(副査) 田中 由美子

審査員(副査) 岡崎 眸

審査員(副査) 楊 峻 (北京語言大学教授)